

A 県の精神科看護職者の職業的アイデンティティの実態

竹 渕 由 恵，酒 井 美 子，関 根 正，田 村 文 子

群馬県立県民健康科学大学

目的：A 県内の精神科病院に勤務する看護職者の基本的属性と職業的アイデンティティの実態を把握する。

方法：郵送法による質問紙調査を実施。分析は，記述統計，職業的 ID 得点の差は t 検定，一元配置分散分析を用いて比較した。

結果：11病院から研究協力の回答があり，918名に質問紙を送付。483名（52.6%）から返信があり，有効回答数は404名（44.0%）であった。本研究対象者の平均年齢 44.2 ± 11.2 歳であり，厚労省報告と日精看報告との比較において，男性看護師，准看護師，大学と短期大学を最終学歴としている割合が高かった。また，臨床経験年数では，「20年以上30年未満」が最も多かった。本研究対象者の職業的 ID 得点は， 68.9 ± 10.9 であった。

結論：A 県内の精神科病院に勤務する看護職者は，男性看護師，准看護師，大学と短期大学を最終学歴としている割合が高く，看護職としての経験年数が長いことが明らかになった。また，基本的属性と職業的 ID 得点には有意差は認められなかった。

キーワード：精神科看護職者，職業的アイデンティティ，職業的アイデンティティ尺度（PISN）

I. はじめに

今日，精神科医療では，入院期間短縮化や身体的ケア，社会的入院患者の退院ケアが求められ¹⁾，医師，看護師をはじめ薬剤師，社会福祉士，精神保健福祉士，臨床心理士，作業療法士，介護福祉士などの多職種が参入している。そして，患者個々の治療目的を達成するために，これらの多職種は連携を通してそれぞれの専門性が問われている^{2,3)}。

精神科看護においては，1995年に精神科認定看護制度が導入され，現在は10分野の専門分化が進んでおり，専門化は進展している。しかし，一方で，厚生労働省の医療機関調整報告（2008年度）によると，精神科病院に勤務する看護職者は他科に比べて准看護師，看護補助者の割合が高く⁴⁾，医療法による精神科看護師の人員配置は，他科の7

対1に対し15対1であるため，少ない看護師が直接ケアに当たるという現状がある。また，日本精神科看護技術協会の意識調査における，精神科看護は社会的に認められているかという問いに対しては，「思わない」という回答が54.3%で半数以上を占めていた⁵⁾。もともと社会的評価の低い精神科の看護師は，自尊心を持ちえず，「精神科看護の専門性」を確立できない歴史的背景がある⁶⁾と言われている。

現在，看護の専門性を確立・向上させる一つの方法⁷⁾として位置付けられている職業的アイデンティティ（以下，職業的 ID）の研究が行われている。職業的 ID は「看護師であることの意味や働くことの意味といった観念に関連したもの」⁸⁾や「職業と自己一体意識」⁹⁾と定義されており，看護師としての専門職化には不可欠な要素といわれている。また，職業的 ID は看護観を象徴する^{10,11)}

と言われ、グレック¹²⁾は職業的 ID の概念を看護実践の基礎となる価値や信念として捉えることの重要性を指摘している。さらに、「職業的 ID の向上は看護師が専門職となるために必要不可欠である」¹³⁾ といわれている。このことから、看護師の専門性の向上において、職業的 ID に着目することは意味あることといえる。

他科に勤務する看護師を対象とした職業的 ID の研究¹⁴⁻¹⁶⁾ では、年齢、経験年数、職位といった基本的属性は職業的 ID の影響要因であることが明らかにされている。しかし、精神科看護師について明らかにしている研究は僅少である。

そこで、本研究では、精神科看護の専門性向上の足掛かりとして、精神科に勤務する看護職者の職業的アイデンティティの実態を把握することを目的とする。

II. 用語の操作的定義

看護師の職業的アイデンティティとは、看護師の価値、信念、目標、関心、才能を含み、看護師であることの意味や看護師として働くことの意味といった観念に関連した主観的な感覚、と定義する。

III. 研究目的

A 県内の精神科病院に勤務する看護職者の基本的属性と職業的アイデンティティの実態を把握する。

IV. 研究方法

1. 対象者

A 県内の精神科病院に勤務する看護職者（看護師・准看護師）。

調査対象に准看護師を含めた理由は、精神科病院で看護業務に従事する准看護師の割合が高い現状にあるためである。

2. 調査方法

社団法人日本精神科病院協会に加盟している精神科病院と県立の精神科病院、精神科病棟を有する国立病院の看護部長等の看護管理者宛に調査依頼文と同意確認書を郵送し、同意の得られた病院に勤務する看護職を対象者として郵送法による質問紙調査を実施した。質問紙は看護管理者を経由して看護職に配布し、回答者本人から個別に専用封筒を用いて返信を依頼した。

3. 質問紙の構成

質問紙は、対象者の基本的属性と佐々木ら¹⁷⁾ によって開発された職業的アイデンティティ尺度（The Professional Identity Scale for Nurses: PISN）により構成した。

1) 対象者の基本的属性

年齢、性別、資格、最終学歴、臨床経験年数、精神科臨床経験年数、職位、を調査した。

2) 職業的アイデンティティ尺度（以下、PISN）

PISN は、Chronbach 係数は0.84と高く、主因子分析、G-P 分析の結果からも内的整合性のある一次元性の尺度であることが確認されている。第1因子は「自尊感情」、第2因子「連続性」、第3因子「斉一性」、第4因子「自己信頼」、第5因子「適応感」の5つの下位尺度からなり、全20項目から構成されている。尺度は「あてはまる」～「あてはまらない」の5段階評価を点数化し、20項目の合計得点を集計した。得点範囲は20～100点であり、得点が高いほど職業的アイデンティティが高いことを意味する。

4. 分析方法

対象者の基本的属性は、対象を区分し記述統計を行い、厚生労働省の医療機関調整報告（2008）¹⁸⁾（以下、厚労省報告）、日本精神科看護技術協会報告（2008）¹⁹⁾（以下、日精看報告）と比較した。PISN に関しては、Shapiro-wilk 検定にて正規性の確認

後，個人属性別の職業的 ID 得点の差は t 検定，一元配置分散分析を用いて比較した．統計的検定は統計ソフト SPSS19.0 for Windows を使用し，有意水準は 5 %未満（ $p<0.05$ ）とした．

5. 調査期間

2010年10月～11月

V. 倫理的配慮

看護管理者および対象者には研究の趣旨，研究参加と中断の自由，匿名性の保持，個人や病院が特定されないように統計処理し研究目的以外には使用しないこと，公表の仕方等について書面にて説明し，無記名による専用封筒での質問紙の返信をもって同意とした．

なお，PISN は著者からの許可を得て使用した．また，本研究は，群馬県立県民健康科学大学の倫理委員会の承認を得て実施した．

VI. 結 果

1. 質問紙の配布と回収状況

A 県内の11病院から研究協力の回答があり，勤務する看護職918名に質問紙を送付した．回答数は483名（52.6%）であり，有効回答数は404名（44.0%）であった．

2. 対象者の基本的属性（表 1）

1）年代

年代は，「20歳代」46名（11.4%），「30歳代」103名（25.5%），「40歳代」100名（24.8%），「50歳代」129名（31.9%），「60歳代」24名（5.9%），「70歳代以上」2 名（0.5%）であり，平均年齢は44.2±11.2歳であった．

2）性別

性別は，「男性」151名（37.4%），「女性」253名（62.6%）であった．

表 1 基本的属性 N=404

区分		人数	%
年代	20歳代	46	11.4
	30歳代	103	25.5
	40歳代	100	24.8
	50歳代	129	31.9
	60歳代	24	5.9
	70歳代	2	0.5
性別	男性	151	37.4
	女性	253	62.6
資格	看護師	291	72.0
	准看護師	113	28.0
最終学歴	高等看護学校（看護専門学校）	287	71.0
	短期大学	21	5.2
	大学	17	4.2
	大学院（修士課程）	1	0.3
	その他	78	19.3
臨床経験年数	5 年未満	43	10.6
	5 年以上10年未満	83	20.5
	10年以上20年未満	92	22.8
	20年以上30年未満	106	26.2
	30年以上	80	19.8
精神科経験年数	1 年未満	20	5.0
	1 年以上 3 年未満	42	10.4
	3 年以上 5 年未満	50	12.4
	5 年以上10年未満	84	20.8
	10年以上20年未満	119	29.5
	20年以上30年未満	56	13.9
	30年以上	33	8.2
職位	スタッフ	287	71.0
	主任	52	12.9
	師長	23	5.7
	看護管理者	42	10.4

3）資格

資格は，「看護師」291名（72.0%），「准看護師」113名（28.0%）であった．

4）最終学歴

最終学歴は，「高等看護学校（看護専門学校）」287名（71.0%），「短期大学」21名（5.2%），「大学」17名（4.2%），「大学院（修士課程）」1 名（0.3%），「その他」78名（19.3%）であった．

5）臨床経験年数

看護職としての臨床経験年数は，「5 年未満」43名（10.6%），「5 年以上10年未満」83名（20.5%），「10年以上20年未満」92名（22.8%），「20年以上30年未満」106名（26.2%），「30年以上」80名（19.8%）であった．臨床経験年数は 1 年から47年であり，平均は18.1±11.1年であった．

6) 精神科経験年数

精神科看護職としての経験年数は、「1 年未満」20名(5.0%),「1 年以上 3 年未満」42名(10.4%),「3 年以上 5 年未満」50名 (12.4%),「5 年以上 10年未満」84名 (20.8%),「10年以上20年未満」119名 (29.5%),「20年 以上30年 未 満」56名 (13.9%),「30年以上」33名 (8.2%) であった。精神科経験年数は1 年から46年であり、平均は12.9±9.8年であった。

7) 職位

職位は、「スタッフ」287名 (71.0%),「主任」52名 (12.9%),「師長」23名 (5.7%),「看護管理者」42名 (10.4%) であった。

3. 基本的属性と職業的 ID 得点の関連 (表 2)

本研究対象者の職業的 ID 得点は、68.9±10.9 であった。

1) 年代別と職業的 ID 得点

「20歳代」67.2±13.1,「30歳代」67.7±11.5,「40歳代」69.0±10.2,「50歳代」70.0±9.0,「60歳代」70.5±14.1,「70歳代」78.5±14.9であった。

2) 性別と職業的 ID 得点

「男性」68.7±10.4,「女性」69.1±11.2であった。

3) 資格と職業的 ID 得点

「看護師」69.4±10.6,「准看護師」67.8±11.5であった。

4) 臨床経験年数と職業的 ID 得点

臨床経験年数「5 年未満」65.6±12.7,「5 年以上10年未満」68.7±11.0,「10年以上20年未満」69.1±11.1,「20年以上30年未満」68.6±9.7,「30 年以上」71.3±10.6であった。

5) 精神科経験年数と職業的 ID 得点

精神科経験年数「1 年未満」64.2±11.0,「1 年以上 3 年未満」67.3±11.8,「3 年以上 5 年未満」68.2±9.2,「5 年以上10年未満」68.8±10.0,「10 年以上20年未満」71.0±11.6,「20年以上30年未満」

68.5±10.8,「30年以上」68.6±10.8であった。

6) 職位と職業的 ID 得点

「スタッフ」68.1±11.2,「主任」71.9±9.6,「師長」71.4±9.4,「その他」の職位69.9±10.3 であった。

以上のことから、本研究対象者の基本的属性と職業的 ID 得点には、有意差は認められなかった。

表 2 基本的属性と職業的 ID 得点 N = 404

区 分		職業的 ID	
		mean	SD
年代	20歳代	67.2	13.1
	30歳代	67.7	11.5
	40歳代	69.0	10.2
	50歳代	70.0	9.0 n.s
	60歳代	70.5	14.1
	70歳代	78.5	14.9
性別	男性	68.7	10.4
	女性	69.1	11.2 n.s
資格	看護師	69.4	10.6
	准看護師	67.8	11.5 n.s
臨床経験年数	5 年未満	65.6	12.7
	5 年以上10年未満	68.7	11.0
	10年以上20年未満	69.1	11.1 n.s
	20年以上30年未満	68.6	9.7
	30年以上	71.3	10.6
精神科経験年数	1 年未満	64.2	11.0
	1 年以上 3 年未満	67.3	11.8
	3 年以上 5 年未満	68.2	9.2
	5 年以上10年未満	68.8	10.0 n.s
	10年以上20年未満	71.0	11.6
	20年以上30年未満	68.5	10.8
	30年以上	68.6	10.8
職位	スタッフ	68.1	11.2
	主任	71.9	9.6
	師長	71.4	9.4 n.s
	看護管理者	69.9	10.3

一元配置分散分析, t 検定 * : p < .05 n.s : not significant

Ⅶ. 考 察

1. 精神科看護職者の基本的属性

本研究対象者の年代は、「50歳代」が最も多く、次いで「30歳代」,「40歳代」で全体の 8 割を占め、平均年齢は44.2±11.2歳であった。厚労省報告の平均年齢 (38.0歳) と比較すると6.2歳高かった。本研究対象者の年代は、20歳代の割合が低く、厚労省報告と同様であった。また、日精看報告では、平均年齢44.7歳であり、50歳代, 40歳代の順で割合は高く、20歳代の割合が低いという結果であっ

たが、その結果とも同様の傾向を示していた。

「男性」の看護職の割合（37.4%）を厚労省報告と比較すると（5.4%）7倍と高く、さらに、日精看報告（28.8%）との比較においても高かった。

資格では、看護職の割合を厚労省報告と比較すると（看護師80.7%、准看護師19.3%）、准看護師の割合は高く、看護師の割合は低かった。日精看報告の看護師の割合（77.9%）と准看護師の割合（22.1%）の結果も同様であった。

最終学歴は、「高等看護学校（看護専門学校）」が7割を占め、「その他」は約2割、「短期大学」、「大学」を合わせて約1割であった。日精看報告と比較しても、「看護師養成所3年課程」の割合は約4割を占めていたことから、高等看護学校（看護専門学校）卒業が多かった。さらに、本研究対象者の最終学歴は大学と短期大学合わせて9.4%であり、日精看報告書の4.5%よりも高い割合を示していた。

臨床経験年数では、「20年以上30年未満」が最も多く、次いで「10年以上20年未満」であった。10年以上の臨床経験を持つ看護職者が全体の約半数を占め、平均臨床経験年数は 18.1 ± 11.1 年であった。また、精神科経験年数では、「10年以上20年未満」が最も多く、次いで「5年以上10年未満」であり、合わせて全体の半数を占めていた。これらのことから、本研究対象者は、看護職としての経験年数が長いことがうかがえた。

以上のことから、本研究対象者は、厚労省報告と日精看報告との比較において、男性看護師、准看護師の割合、大学と短期大学を最終学歴としている割合が高く、看護職としての経験年数が長いことも明らかになった。

2. 基本的属性と職業的 ID 得点の関連

本研究対象者の年代別、臨床経験年数別の職業的 ID 得点は、他科の看護職を対象とした池田ら²⁰⁾の先行研究結果よりも高い得点であった。こ

のことから、本研究対象者は年代別、臨床経験年数別において、職業的 ID 得点が高いことが示唆された。さらに、本研究対象者の職業的 ID 得点は、精神科看護師を対象とした糠信ら²¹⁾の研究の職業的 ID 得点（ 64.0 ± 11.1 ）と比較しても高い得点であった。このことから、本研究対象者は糠信らの対象とした精神科病院に勤務する看護師と比較し、職業的 ID 得点が高いことが示唆された。

本研究対象者の「年代」「性別」「資格」「最終学歴」「臨床経験年数」「精神科経験年数」「職位」という基本的属性と職業的 ID 得点の間には有意差は認められなかった。先行研究からは、職業的 ID に関連する要因として基本的属性が指摘されているが、本研究結果においてこれは支持されなかった。したがって、本研究対象者において、基本的属性は職業的 ID 得点に関連する要因ではないことが示唆された。

本研究の調査に使用した PISN は、「自尊感情」「連続性」「斉一性」「自己信頼」「適応感」の5つの下位尺度からなり、「適応感」の相関係数が 0.73 （ $p < 0.05$ ）であり、PISN と最も相関のある尺度である。適応感とは、看護師という職業が自分に合っているという感覚と定義されている。Erikson は職業的 ID を個人のアイデンティティ形成の一側面であり、職業の集団のもつ規範や価値体系との相互作用の中で自覚される主観的な感覚としている²²⁾。このことから、本研究対象者は、精神科看護が看護師である自分に合っているという感覚を持っていることが示唆される。現在配属されている部署への適応感との関連を検討した研究からは、現在の配属場所に適していると感じている者の職務満足度が適していないと感じている者より有意に高いと報告されている²³⁻²⁵⁾。このことから、職場への適応感や職務満足度が精神科看護職者の職業的 ID に関連する要因であることが考えられた。

VIII. 結 論

A 県の精神科看護職者の実態調査から以下の点が把握できた。

1. 対象者の平均年齢は、 44.2 ± 11.2 歳であり、臨床経験年数では、「20 年以上 30 年未満」が最も多かった。
2. 性別では男性看護師の割合、資格別では准看護師の割合が高かった。最終学歴では、大学と短期大学の割合は約 1 割を占め、日精看報告と比較して高かった。
3. 年齢、性別、資格、臨床経験年数、精神科経験年数、職位といった基本的属性と職業的 ID 得点には有意差は認められなかった。

IX. 研究の限界と今後の課題

本研究では、A 県内の精神科看護職者を対象に基本的属性と職業的 ID 得点のみの調査を行った。調査に使用した PISN は、他科の看護師を対象に作成された尺度であり、精神科領域での活用は少なく、今回の結果と比較するには限界があった。

本研究より、適応感と職業的 ID の関連が考えられた。職場環境への適応感や職務満足度と職業的 ID の関連を調査し、精神科看護職の専門性の向上につなげていきたい。

X. 謝 辞

本研究にご協力頂いた看護職の皆様に深く感謝いたします。なお、本研究は、平成 22 年度群馬県立県民健康科学大学共同研究費の助成を受けて実施した。

引用文献

- 1) 天賀谷隆(2007)：精神科看護師が果たしてきたこれまでの役割と今後の期待，臨床精神医学，36(2)：133-138

- 2) 宇佐美しおり(2010)：精神看護専門看護師の役割と活動，病院・地域精神医学，52(3)：23-25
- 3) 田上美千佳(2010)：精神科看護の専門性の広がりと深まり，病院・地域精神医学，52(3)：11-13
- 4) 厚生労働省(2008)：医療機関調査報告。
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/08/index.html>)
- 5) 日本精神科看護技術協会(2008)：2008 年度日本精神科看護技術協会会員基礎調査報告
- 6) 藤野ヤヨイ(2003)：精神科病院の特質と入院患者の人権，現代社会文化研究，28：171-188
- 7) グレック美鈴(2000)：看護師の職業的アイデンティティに関する中範囲理論の構築，看護研究，35(3)：2-9
- 8) Fagermoem. MS. Professionai identity (1997): values embedded in meaningful nursing practice, Journal of advanced Nursing, 25: 434-441
- 9) グレック美鈴(2000)：看護における 1 重要概念としての看護婦の職業的アイデンティティ，Quality Nursing, 6(10)：53-58
- 10) 関根 正，奥山貴弘(2006)：看護師のアイデンティティに関する文献研究，埼玉県立大学紀要，8：145-150
- 11) 奥山貴弘(2007)：リハビリテーション領域における看護師の職業的アイデンティティの検討一般病院との比較から，埼玉県立大学紀要，9：13-20
- 12) 前掲書 9)，p73-78
- 13) 岩井浩一，澤田雄二，野々村典子他(2001)：看護職の職業的アイデンティティ尺度の作成，茨城医療大紀要，6：57-67
- 14) 葛西敦子，大坪正一(2005)：看護職の専門性を構成する概念，弘前大学教育学部紀要，93：89-96
- 15) 葛西敦子(2005)：病院に勤務する看護師の専

- 門性の実践に関する研究, 弘前大学教育学部紀要, 94: 91-103
- 16) 小谷野康子(2000): 看護専門職の自律性に関する概念の検討と研究の動向, 聖路加看護大学紀, 26: 50-58
- 17) 佐々木真紀子, 針生亨 (2006): 看護師の職業的アイデンティティ尺度 (PISN) の開発, 日本看護科学会誌, 26(1): 34-41
- 18) 厚生労働省 (2008): 平成20年医療施設(静態・動態)調査・病院報告の概況
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/08/index.html>)
- 19) 前掲書 5)
- 20) 池田由紀子, 尾崎フサ子(2009): 臨床看護師の現任教育と職業的アイデンティティ形成の関連, 日本看護学会第40回看護管理論文集: 240-242
- 21) 糠信憲明, 中村百合子, 大沼いづみ他(2007): 精神疾患へのスティグマと看護師の職業的アイデンティティ 精神科看護師と一般科看護師の比較, 広島国際大学看護学ジャーナル, 5(1): 27-37
- 22) Erikson.E.H, 岩瀬庸理(1982): 自我同一性, p12, 誠信書房, 東京
- 23) 高田貴美子, 草刈淳子, 川口孝泰(1995): S大学医学部付属病院に勤務する看護婦の職務満足に関する検討, 日本看護研究学会雑誌, 18(1): 53-62
- 24) 田島和子, 出水玲子, 田畑節子他(1998): 看護婦の職務満足に関する検討 K大学病院付属病院におけるアンケートより, 日本看護研究学会雑誌, 21(3): 195
- 25) 中山洋子, 野嶋佐由美(2001): 看護研究の現在 現状を変える視点 看護婦の仕事の継続意志と満足度に関する要因の分析, 看護, 53(8): 81-91

The Reality of the Professional Identity of Psychiatric Nurses in A Prefecture

Yoshie Takebuchi, Yoshiko Sakai, Tadashi Sekine and Fumiko Tamura
Gunma Prefectural College of Health Sciences

Objectives : The purpose of this study was to clarify the reality of the basic attributes and professional identity of nurses who work in psychiatric hospital in A prefecture.

Methods : Questionnaire survey was conducted by mail subject to the nurses who work in psychiatric hospitals in A prefecture (licensed nurse, practical nurses). The data was analyzed, descriptive statistics, difference of professional ID score were compared using t-test and one-way analysis of variance.

Results : There were 11 respondents from the hospital to research cooperation in A prefecture. There is a reply from 483 (52.6%) and the number of valid responses was 404 (44.0%). Study subjects has mean age 44.2 ± 11.2 years old, compared to the Ministry of Health, Labour and Welfare report and the Japanese Psychiatric Nurses Association report, has a high proportion of male nurses, practical nurses, has a high proportion of university and junior college as the last education level. In addition, the number of years of clinical experience, was the most "less than 30 years more than 20 years." Professional ID score of study subjects was 68.9 ± 10.9 .

Conclusion : The high rate are man nurses, practical nurse, university and junior college as the last education level the nurses working in psychiatric hospitals in A prefecture, further the number of years of experience as nursing long. In addition, there were no significance between basic attributes and professional ID score.

Key words : psychiatric nurses, professional identity, The Professional Identity
Scale for Nurses (PISN)